

大戦中における中村草田男の俳句創作活動

Haiku Creative Activity By Kusatao Nakamura during World War II

中 島 賢 介

第二次世界大戦の戦況が深刻化する中、伝統俳句作家は時局についての句作を避け、新興俳句運動作家は特別高等警察による弾圧を受けた。人間探求派の俳人中村草田男は、伝統俳句に対して「季題趣味」だと批判し、新興俳句に対しては「季題軽視」だと論難した。その独自の俳風から、時局に従わなければ小野撫子に告訴するとう脅迫まで受けたが、句作に対する姿勢を崩さなかった。その成果がA・デューラーの銅版画『騎士と死と悪魔』の俳句化という形で現われた。

はじめに

俳壇の真中蜥蜴の前に独り（一九四四年）

昨年出版された田島和生の『新興俳人の群像 「京大俳句」の光と影』が、第二十回俳人協会評論賞を受賞した。この作品は、京大俳句事件に関する多くの資料から事実関係を整理し、事件の真相に迫った文献である。事件そのものを取り上げた単行本には、一九七三年に出版された小堺昭三の『密告 昭和俳句弾圧事件』がある。だが、後者は、西東三鬼に関する記述を巡って裁判となるなど憶測で書かれた記述が多い。前者は、その裁判記録を踏まえなが

ら、事実関係の範囲を逸脱しない程度に留めている。

興味深いことに、二つの作品には、ともに新興俳句運動とは一線を画していた、人間探求派の俳人中村草田男に関する言及がなされている。これは、特別高等警察（以下、特高）による弾圧が新興俳句作家のみならず、有季定型の原則を堅固してきた「ホトトギス」の内部にいた草田男にまで及んだという事実を明確にしている。草田男は結局、「ホトトギス」からの投句中止を余儀なくされた。今回は、この過程において、草田男が戦中戦後の俳壇に投げかけたものとは何であつたか、そして非常時をどのように乗り越えて来たかという点について考察する。

一 時局からの孤立

軍隊の近づく音や秋風裡

機影去り直視し得る冬日あり。

本格的な戦時に向けて、一九二八年治安維持法が改定され、特別高等警察網（特高）が全国に設置される。言論統制に関する法律には、主に一九三八年に公布された国家総動員法と一九四一年公布の言論出版集会結社等臨時取締法がある。こうした機構と法が整備される

過程で、恣意的な取り締まりが実施されることとなった。⁴ 言論統制の極みは一九四二年に起きた「横浜事件」が有名である。雑誌の編集者や経済評論家など六十人が、「共産党再建」という理由で特高に検挙された。

俳壇にとつての言論統制は、「京大俳句」を皮切りに、多くの新興俳人が逮捕された結果、全国の新興俳句俳誌が廃刊に追い込むという形で行われた。「京大俳句事件」である。特高は、俳人たちに共産主義者というレッテルを貼って連行し、徹底的に取調べを行った。

『密告』の中で著者のインタビューに、草田男は「あのころは私にだって、時局に対する認識がありましたよ。国難きたる、という気持ちにはね。」と答えている。日中戦争が始まる一九三七年以来、国家総動員法（一九三八年）、国民徴用令（一九三九年）が次々と公布される中、戦争俳句は、新興俳句運動隆盛の契機として俳人たちの旗印となった。火野葦平の『麦と兵隊』を火野葦城や秋元不死男らが俳句化を試み、加藤楸邨に「戦火想望俳句」と批判されたのもこの頃である。⁵

草田男がエッセイや座談会の中で、戦争俳句を論じるようになるのは一九三八年からである。その前年、日本は中国と全面戦争を開始し、召集者の数も増大する。南京が陥落しても、勝利には程遠く、召集された俳人が戦地で句を詠み出すようになる。これがいわゆる戦争俳句である。しかし、この段階では、戦地の状況を直接体験による句と、直接戦争に加わらない銃後の句とは、その趣が異なっていた。前者は「戦争俳句」、後者を「戦火想望俳句」と呼ばれ、特に後者は実体験の伴わないと人間探求派の批判的になった。だが、一九三九年以降は戦争体験者が急増し、区別の意味が次第に消滅し

た。その一方で、「京大俳句」同人の新興俳句俳人たちは、無季俳句を容認し戦争俳句を奨励し、自らも次々と戦争俳句を発表した。

草田男の戦争に対する認識も、他者と大きく異なったものではなかった。一九三八年の段階において、座談会の席上戦争について話題が及ぶと、（雑誌の七割が戦争ものだという意見を受け）「ファッショでもないにしても、日本人なら兎に角興奮はしますからね。」と答え、短歌の場合は直截的に戦争を詠むことができるが俳句の場合は困難であると分析している。この段階においては、彼自身も時局に対する認識はさほど深刻なものではなかったと推測される。

だが、一九三九年「ホトトギス」に発表された「拔萃散步」では、火野葦平の『麦と兵隊』についての言及には、座談会の発言とは趣が異なる。

作者が現在も尚弾道の前に命を曝し、身に寸時の余暇なき境遇にあること、又、戦争の真中にある現在の日本の国の諸事情が、思想性の豊かな戦争文学の誕生などを決して許さないであろうということも考え、且又作者自身、「あれは純粹の文学作品ではない」と明言していることを考えれば、我々は軽率な評言を口にすることを慎まなければならないのであろう。

一九四〇年二月、新興俳句運動の旗頭であった「京大俳句」、「天香」同人八人が特高により一斉に検挙されるという事件が起きた。その後、五月、八月の計三度にわたり、検挙者は十五名を数えた。この年の十二月「帝国大学新聞」に掲載された「古き童児——季節の再吟味」の中で、草田男も時局に関する事柄について「俳壇にも文芸の他の分野に於けると同様、新体制に順応すべく、連盟組織の

中 島 賢 介

成就が計画され、これが近い将来に実現しようとしている。」と述べている。これは俳誌弾圧とほぼ併行して組織された「日本俳句作家協会」の結成である。国家は、時局にそぐわない俳誌に「危険思想」というレッテルを貼り弾圧を加え、言語統制政策を着々と整備していく。この年を境に、「時局に対する認識があつた」草田男は、自らの主張を控えるようになった。この遠慮は、時局そのものを鑑みてという理由ではなかった。

草田男本人の発言を始め、多くの文献から、草田男本人への弾圧が加わっていた事実が明らかにされている。まず、本人の証言から、引用する。

時間的順序を追って説明しなければ十分にわからないでしょうが……十五年の十二月に、日本俳句作家協会が成立して、俳句部会ができ、だいたい全部の俳人がそれに加わった。加わってみると、はじめて解つたのですがすべての様子がもう一変していた。情報局などができたのは、もうずっと後でしょうが、その前身にあたるものは、既に背後に存在していたとみていいでしょう。後になつて気がついたのですが、「当局」とか「特高」とかの名前をふりかざして、俳壇の先輩層（部会の幹部）へは、俳壇をできるだけ時局向きに統制してゆくことを旨とせよという意味の通達、小野撫子から伝えられて居たわけでしょう。部会の発会式に行つてみたら、先輩層の我々に対する態度がまるで昨日とかかわっているのです。

この発言に登場する小野撫子が俳誌弾圧に加担していた人物とされている。彼は、文部省の戦時国民情操調査委員に委嘱され、時局

に沿わない句を発表する俳誌に次々と抗議文を送付し、特高に情報流していたという事実が、先述した文献などで明らかにされている。彼の「愛国心の発露」により、時局にそぐわない俳人に対しては容赦なく糾弾した結果、その矛先が草田男にまで及んだ。撫子は、草田男が所属する「ホトトギス」主宰者の高浜虚子に再三注意を促した。

ところが、後述するが、草田男は糾弾の矛先が自分に及んでいたと知りながらも先輩層を揶揄する句を発表した。そこで、撫子は委嘱されている任務を辞退し、草田男を告訴しようとした。そのため、草田男は自分のことを思い忠告した虚子に詫び、「ホトトギス」同人を辞退し、撫子の自宅まで赴き、「今後はかたちだけでも、風景俳句の範囲に属するようなものを、できるだけ発表するよう気をつけるつもりです」と告げ、許しを乞うた。虚子が草田男の謹慎処分の処置を取ったという報を受け、撫子も告訴を取り下げ事態は収束に向つた。その後、一九四三年二月に撫子が死去するが、特高による俳誌弾圧は終戦まで継続されることとなる。

一九四四年には、改造社の「俳句研究」が廃刊となり、新「俳句研究」誌が出版される運びとなつた際、「戦時統制が劃されて以来、ここ数年の俳壇には、批評及び批評意識が殆ど終熄してしまつたかの観がある。これは、明らかに統制の意味の理解の不消化か、運用の錯誤かを示すものである。余りにも激しい転換に直面し、それに応ずるに迫られた最初の一、二年は致し方なかつたとしても、もはや今は、時局切迫すればする程、真の意味での活力に漲つた俳壇を取り戻さなければならない時期である。」¹⁰と議論を鼓舞している。また、初出不明の二編のエッセイ「海にちなんだ俳句」「芭蕉二百五十年忌を前にして」においてにも、「愛国心」を鼓舞する内容

となっている。

本職である成蹊学園の教師生活においても、困難な状況に直面している。というのも、次々と出征していく教え子を見送るだけでなく、政府による教師としての再教育を強要されることによつて、時局に対する疑問を抱いていたという事実が彼自身の告白から窺える。

その再教育訓練の内容そのものが余りにも非人間性を極め、方便論の歪曲に終始しているのに、少なからぬ疑念を抱かざるを得なかった。¹¹

このように時系列に沿って見ていくと、時局の流れに対して草田男は絶えず反応はしていたが、俳人として、あるいは教師として立つ位置としては、時局にある程度の距離をとっていることに気づかされる。時局に沿うものでもなければ、時局に逆らうものでもない。時局に対して「認識」はしているものの、時代に翻弄されているわけでもない。翻弄されたのは、新興俳句運動との関わりであり、ホトトギス同人たちとの関わりにおいてなのである。

二 新興俳句運動との距離

一九一六年から新興俳句運動が提唱され、花鳥諷詠によらず、新しい生活感情や心理、知性を表現されるようになった。その頃、折りしも戦争に向う時期でもあり、今までにはなかった戦争への思いを句に託す、いわゆる戦争俳句が詠まれるようになった。こうした経緯に対して、草田男は新興俳句運動あるいは新興俳句作家とどのような距離を置いていたのであろうか。

草田男のエッセイの大半が、この新興俳句に対する批評や反論であった。社会生活を重視するあまり、季題を軽視する句に対して絶えず警鐘を鳴らしていた。また、新興俳人らとの座談会においても、エッセイ同様、句作の姿勢や句の内容に対する批評を展開した。山口誓子や西東三鬼は積極的に戦争俳句の創作を促し、戦争俳句によつて新興俳句運動そのものを活性化させようと考えた。だが、先述した通り、提唱時から数年は戦地における句ではなく、いわゆる戦火想望俳句が圧倒的な位置を占めていた。

草田男は、一九三八年当初、こうした非常時だからこそ、今一度新興俳句運動は反省すべきである。「戦争に行っているかの如き一種の錯覚想像力を極度に発揮してみるような俳句作品を、どうして作らなければならぬか」¹²と、その乏しい現実性を指摘した。特に座談会における西東三鬼の主張には、戦争俳句というジャンルを新興俳句運動の「領域」確保が目的だと明言する場面がある。

私のいったのは無季俳句を作るためばかりと云うのじゃなくて、われわれが一番関心を持つものは戦争である。だから戦争俳句を作る、こうして実際にやってみれば、われわれが、確立したいと思っている無季俳句の領域だと言う意味です。¹³

加藤楸邨や草田男に、その領域が無季俳句でなければならない理由が存在しないと反論されるが、新しい局面を迎え、その社会の変化や人々の関心、心理などが一番反映されやすい句が無季俳句であると新興俳人は反論する。しかし、草田男は自らの句作の範囲を戦争俳句だけ限定することに対して反論し、「比較のおだやかな、併し重圧する生活相其物にはどうして関心が持てないんですか。」と

問題を提示している。

また、一九四〇年の「歩み寄る二つの新方向」では、新興俳句の停滞した事態について、「これこそ彼等従来の方向と作品とが厳しい現実によって試練されるに至った絶好の反省の時期である」と述べた。

だからといって、彼にとって無季俳句が批判の対象だけであつたわけではない。新興俳句作家たちと積極的に議論を交わすことで、彼らの主張を客観的に評価しようとしていたことも事実である。

新興俳句の運動は起るべき所があつて起つた。微温的な季題趣味に情感を固定せしめ、現実の生活から遊離した独善に陥つていた従来の俳句を、あらゆる方面に於て解放しようとした。そこまでは、彼等新興俳人は確かに飽くまでも正しかった。¹⁴

この主張にあるように、新興俳句そのものを否定し、凌駕しようという意図で新興俳人たちと交わつていたのではなく、むしろ、領域を設定し、無季俳句で詠もうとすることなどの運動の方向性に問題があると指摘しようとしていた。その上で、状況の変化とともに、新興俳句作家たちも「己れ自身の生活圏内に帰還しようとし、己れ自身と俳句との間に横たわる空隙を圧縮めようとする営みが少数者の手によつて可成り素朴に着手されはじめたのが顕著に私の眼を惹く」とあるように、方向性が是正されてきたことを評価していることが分かる。

だが、この年にすでに「京大俳句事件」が置き、出版された五月には奇しくも第二次事件が起きている。ということは、草田男の意識では、是正されかけた時期に新興俳句が特高により弾圧されるこ

となる。草田男にとっては、自分が評価し続け、方向性が違えば指摘するなどして、これからの運動に期待しようとしていた矢先に弾圧事件が起きた。それも、自分の位置する有季定型派の作用が多分に働いていた事実を、この後自分の身を以て知ることとなつたのである。

三 ホトトギス派との距離

香西照雄が指摘する通り¹⁶、草田男は俳句が季題趣味すなわち対自然の写生に偏り過ぎて、主体となる人間に対する写生を怠つてきた。これは、虚子が主張した客観写生・花鳥諷詠が文字通り句の形をとつた自然界のデッサンであるが、川端茅舎や草田男にとって、自然はもはやデッサンの対象ではなくなつていた。ホトトギス派俳人の多くが、デッサンを目的としたが、草田男らにとつてデッサンはあくまでも手段であり、そこに描かれる自然や人間の姿が象徴する、物事の根源事象を導き出すための材料であつた。香西はこれを西洋思想からの影響と考えている。

しかし、この俳句観は、虚子が唱える理論から大きく逸脱するものであるが、虚子自身は戦中においても草田男の作品を巻頭句に据えるなど、草田男への印象はむしろ好意を持っていた。それは、草田男は理論こそ異なるが、有季定型という派の伝統を固辞してきたからであり、虚子の教えを自分なりに受け入れてきたからである。座談会でも、虚子に向つて、自分の今の有様を正しく把握していたことが大変嬉しいと感謝の辞を添えている。また、戦後になつて当時を回想する際に、草田男は、「大東亜戦にいつて以後、文芸界も周知の如く統制一色の時代にいつた。俳句界に於ける或る少数の人々は、其統制を弾圧にまで戸惑いさせようとした事実がある。其

間にあつて終始親身に私を保護し続けて下さったのは高浜虚子先生であつた」¹⁷と、虚子の庇護があつたゆえに活動できたことを明言している。

だが、そのことをよしとしない先輩層の俳人たちがいた。だが、虚子の面前で草田男について批評するだけの器がある人物がいなかった。彼らは、戦中において虚子の意向と時局の両方に沿わなければならない立場となつた。そこで、面前で草田男を批判するのはなく、小野撫子という時代の寵児を利用して、一旦虚子から遠ざけた上で非難する方法を採用した。それが意識的であれ、無意識であれ、結果的には、撫子の糾弾を受けた後、草田男は先輩や後輩にあたる俳人からの総攻撃を受けた。

例会などへいつても昨日までは青二才だつた俳人が、わたしを面罵するんですよ。句評でもやつたりすると「いつまでしゃべつていやがるんだ。非国民はひつこんでろ」とね。わたしは謹慎していたし、日蔭ものにされていましたから、どんなに侮辱されても痛めつけられても、沈黙しているしかありませんでしたがね。こういう青二才は、小野撫子という虎の威を借りるキツネでしたね。ほんとうにあのころは厭な世の中だつた」¹⁸

草田男は、無季俳句作家を批判するだけでなく、伝統俳句側にも批判の眼を向けていた。

有季伝統俳句は、俳句が俳句であり得る所以の正しい創作過程を経ているために、兎に角、俳句的リアリティのみは之を裡に豊かに湛えていた。併し、作者の自己内容が一句に作用してくるこ

とを不当に遮断していたが為に、其俳句的リアリティは、すこぶる固陋な季題趣味のうちに踟躕すべく余儀なくされてしまった。だから彼等が、今、戦争俳句を物しようとすれば、季題趣味によつて固定されてしまつた季題と、戦争の人事的素材とを、無理に結合せしめようとする苦役を繰り返さねばならない。しかも、閑却されきたつた自己内容は一朝一夕に之を生育せしめるわけにはいかない。偉れた戦争俳句を近い将来に期待し難いと、誓子氏の説いて居るところは、そのままに肯定せざるを得ない。¹⁹

すなわち、山口誓子が「伝統有季俳句」「新興有季俳句」「新興無季俳句」の三部門に分類し、「伝統有季俳句」は季題趣味と国民感情との「配合」の成就が問題となる。しかし、余りにも季題趣味が他の感情を圧倒するのを慣わしとして来ただけに、戦争俳句の実作を見ても、真の意味の国民感情は容易に其中に活かされることは許されていないのが大部分であると批判した。この主張を草田男はほぼ認める発言をしたのである。季題趣味と揶揄されたホトトギス内部の俳人に見れば、虚子が許容している草田男を面前で抗議することが許されなかつた。自分たちの感情の代弁者として小野撫子が登場したのである。この威を借るための虎の出現に、草田男の台頭を阻む契機ができた訳である。これを仮に「草田男からの離反」と呼ぶならば、草田男の離反の意思表示が、虚子に従い撫子に従うこととでなされたといつてよい。草田男は、今こそ俳句という文芸について考えなければならない時期にきているにも関わらず、自ら言語統制する側に回るホトトギス派俳人が許せなかつた。これを例えるならば、皆と違つたことをして目立ってしまった子どもがいじめられつ子となり、何ら意見を持たない周囲の子どもがいじめつ子の側

についた状態であった。もはや草田男の理解者は川端茅舎しか存在しなかった。だが、この理解者もこの世を去ってしまい、彼は自暴自棄的に先輩後輩を揶揄するような作品「青露変」を発表する。そして、その結果、小野撫子に糾弾されることとなる。

これが俳壇の状況であると考え、草田男はホトトギスを中心にした周囲の俳人たちが自分に対するネガティブな感情を把握していなかった。彼にしてみれば、例え周囲がこうした感情を抱いていなかったとしても、これほど悪質なやり方で糾弾されることは露も知らなかった。それゆえ、この身内に対する仕打ちに衝撃を受けたのである。

四 戦中における絵画と俳句

一九四四年、草田男は、ドイツ・ルネサンスを代表する画家アルブレヒト・デューラーの銅版画「騎士と死と悪魔」を十三句で作品化した。この銅版画は、草田男が旧制松山高高の時から所持していたものであり、愛好する絵画の一つであった。それにしても、なぜこの非常時に版画を俳句化する試みを敢えて行なったのか。芳賀徹は著書『絵画の領分』で、その理由を次のように述べている。

崩れてゆこうとする昭和の日本を、そしてそのなかで崩折れてゆこうとする自分を、俳人草田男は「愛好」久しいデューラーと、デューラーへの果敢な挑戦とによって辛くも支えようとし、辛うじて支え切ったのである。²⁰

この群作には、「茅舎には『デューラーの崖』なる一連の作あり」註が添えられている。

草田男の句のよきライバルであり理解者でもあった川端茅舎は、もともとは画家であり、草田男と同郷の伊丹万作、重松鶴之助らが所属していた草土社と関わりがあった。その茅舎は、遡ること五年前の一九三八年に「デューラーの崖」と題して連作を完成させていた。芳賀は、この群作に茅舎の影響のみならず、茅舎自身の姿を想起していると指摘している。

騎士は負ふ故茅舎の露の崖を²¹

版画を見る限りにおいて、露はどこにも見当たらない。だが、茅舎の代表作である「金剛の露ひとつぶや石の上」を始めとして、露を詠んだ美しい象徴句があることを挙げ、草田男は故友のための弔い合戦と解釈できるとしている。芳賀の指摘の通り、彼の心境には、先述した通り、自分のよき好敵手であり理解者であった川端茅舎に先立たれ、新興俳人やホトトギス派俳人たちを敵に回して孤立せざるを得なかった。この孤立感こそ、この群作の創作動機であったと考えられる。

夏瘦せの魍魎騎士はかへりみず

智の蛇喰ふ個の命数の砂時計

夏枯木死神騎士の眼路追ひ得ず²²

いかなる時にあっても、いかなる障害に遭おうとも、決意を持つて雄雄しく歩む騎士の姿こそが今の自分のあるべき姿と重ねているのである。草田男は、まさに孤立した状況下において、勇気を奮い立たせるために、この群作の制作に着手したのではないか。

おわりに

草田男は、戦中の俳壇から何を学んだか。戦争俳句により隆盛期を迎えた新興俳句運動は、特高が共産主義者として検挙することによって強制的に衰退を余儀なくされた。その一方で、伝統俳句作家は積極的に言語統制する側について、作風の異なる草田男を非難すれども、何ら発展することもなく終戦を迎えることとなった。時局が深刻化すれば、自分を奮起させるために句を作り続けた。一見孤立した状況下においても、こうした彼独特の他者との距離感があつたからこそ、戦後比較的大きな混乱もなく、すぐに俳誌「萬緑」の主宰者となつて活動を再開させることができた。これは、彼が言語統制の加害者にもならず、新興俳句作家として検挙されることもなかったという、終始一貫して「自己」を貫くことができたことによる。体制によつて自己が絡め取られない自己のあり方を草田男に見ることができる。

注

- 1 田島和生『新興俳人の群像「京大俳句」の光と影』（思文閣出版、二〇〇五）
- 2 小堺昭三『密告 昭和俳句弾圧事件』（ダイヤモンド社、一九七九）
- 3 句集『長子』（沙羅書店、一九三六、一二六頁、一六二頁）
- 4 『中村草田男全集』第一巻（みすず書房、一九八九）
- 5 鹿野正直『近代思想案内』（岩波文庫別冊十四、一九九九、三三九頁）
- 6 浅井清他編『新研究資料 現代日本文学』第六巻（明治書院、二〇〇〇、二五七頁）
- 7 『俳句研究』（一九三八・一 座談会「現代俳句の問題」）
- 8 『中村草田男全集』第二二巻（二二三頁） 注3参照
- 7 「ホトトギス」（一九三八・五「拔萃散歩」）
- 8 『中村草田男全集』第八巻（三二五頁）
- 9 『帝国大学新聞』（一九四〇・一二・二）
- 10 『中村草田男全集』第八巻（三八九頁）
- 11 『俳句研究』（一九五四・一 座談会「俳句事件」）
- 12 『中村草田男全集』第一三巻（三六四頁）
- 13 『俳句研究』（一九四四・十一「新『俳句研究』誌への期待」）
- 14 続く「海にちなんだ俳句」や「芭蕉二百五十年忌を前にして」も『中村草田男全集』第八巻（五一三頁）
- 15 「小二教育技術」（一九六九・九「このごろ思うこと」）
- 16 『中村草田男全集』第九巻（四二七頁）
- 17 『俳句研究』（一九三八・八 座談会「戦争俳句その他」）
- 18 『中村草田男全集』第二二巻（二二六頁）
- 19 同右（二二六頁）
- 20 「国民新聞」（一九四〇・五・二一〜二四「歩み寄る二つの新方向」）
- 21 『中村草田男全集』第八巻（三六〇頁）
- 22 同右（三六四頁）
- 23 香西照雄『中村草田男 新訂俳句シリーズ・人と作品14』（桜楓社、一九六三、二五頁）
- 24 「萬緑」（一九四六・一〇「創刊に際して」）
- 25 『中村草田男全集』第八巻（五三三頁）
- 26 同注2（二八四頁）
- 27 「俳句研究」（一九三八・五「戦争と俳句雑感」）
- 28 『中村草田男全集』第八巻（二八七頁）
- 29 芳賀徹『絵画の領分 近代日本比較文化研究』（朝日選書、一九九〇、六一三頁）

中 島 賢 介

- 21 句集『来し方行方』（自文堂、一九四七、一二六頁）
22 同右

参考文献

- 稲畑汀子・大岡信・鷹羽狩行監修『現代俳句大事典』（三省堂、二〇〇五）
高崎 隆治著編『戦争詩歌集事典』（日本図書センター、一九八七）
北溟社編集部編著『俳人が見た太平洋戦争』（北溟社、二〇〇三）
『新研究資料 現代日本文学 俳句』第六卷（明治書院、二〇〇〇）
山本健吉『定本 現代俳句』第六版（角川選書、二〇〇二）
沢木欣一・鈴木六林男『西東三鬼』新訂俳句シリーズ・人と作品一三（桜楓社、一九七九）
栗田靖『山口誓子』新訂俳句シリーズ・人と作品一五（桜楓社、一九七九）
西垣脩『現代俳人』新訂俳句シリーズ・人と作品二〇 新訂版（桜楓社、一九八〇）